

[第24回 学術集会 学術集会長企画]

家族をユニットで理解するための研究とその成果の利用： 家族看護学研究法リレーシンポジウム

京都橘大学

(座長) 河原 宣子

日本家族看護学会第24回学術集会は、「地域包括ケアの時代に家族看護に期待される実践」というテーマで開催された。この「実践」を支える基盤が、まさに家族看護学研究である。家族看護学の研究は、対象者一つとっても、家族成員や家族のサブシステムに焦点を当てたもの、家族システム全体にアプローチしたもの等多岐にわたる。また研究手法も多様である。

そこで、今回のシンポジウムは、「家族をユニットで理解するための研究とその成果の利用」というテーマで、今後の家族看護学研究の方向性に一石を投じる内容とした。法橋尚宏教授（神戸大学大学院）からは、家族機能が変化する過程を踏まえ、家族をユニットとしてとらえる難しさ、について問題提起があり、それを受けの形で、いかにして研究の成果を統合していくのかについて本田順子講師（神戸大学大学院）、小林京子教授（聖路加国際大学大学院）、

池田真理教授（東京女子医科大学）がそれぞれのご研究を紹介された。

シンポジウムでのディスカッションや参加者のアンケートから、「家族の定義」への研究的関心が高まった、家族をユニットとして考える上でのきっかけづくりとなり、さらに具体的な研究内容をもっと知りたい等のご意見があった。

家族看護学研究は何をめざすのか、と今一度、再考すると、やはり「その家族にとっての幸せは何か」を追究することに行き着くのだという印象を持った。そしてそれは、家族をユニットとして理解していくことで深まるのではないかと思う。そのためにも、本シンポジウムで学び得た知見は、今後の研究方法論を発展させる上で大変意義深かったと考える。

シンポジストとご参加いただいた皆様に

感謝の意を込めて。